

「映画先進県へのすすめ」

株式会社 阿部秀司事務所 代表取締役
映画「RAILWAYS」 製作総指揮
阿部 秀司 氏

1. 富山で「RAILWAYS」を作って

自己紹介

富山県で撮影した映画「RAILWAYS 愛を伝えられない大人たちへ」が完成しました。本当にご協力ありがとうございました。桑名会長をはじめ、富山県の方々、富山地方鉄道、本当に、自分で言うのもなんですけれども、素晴らしい映画ができたと思っております。本日お見受けしたところ割と当てはまる、60 歳という、僕も 62 で、自分のことも含めてひとつ 60 というのは転機かなと思って作りました。



僕は 1974 年に大学を卒業しまして、86 年にロボットという会社を立ち上げ、この映画を製作している会社ですが、ここでコマーシャルの映像を作り始め、1994 年に「Love Letter」という映画、これをご覧になられた方がいらっしゃるかどうか分かりませんが、岩井俊二監督の第 1 回目の作品、そこから映画というものを作り始めて、これまで 30 本以上の映画を作って参りました。

「RAILWAYS」誕生エピソード

今回この「RAILWAYS」という映画、実は 2 作目になります、1 作目は島根県にあります一畑電車さん。宍道湖を中心にして回っている、非常にのどかな、富山地鉄さんと比べるとはるかに小さな電鉄会社さん。営業距離数も 50 km 未満で本当に素朴な電車で、たまたま前作の錦織(にしこおり)監督は島根出身で、一畑電車という地元の愛称で「バタデン」、一畑の「バタ」と電車の「デン」をとって、「BATADEN」という映画の企画を僕に持ってきました。そういう企画がたまにあるんですが、何故持ってきたかという、僕が実は、もうカミングアウトしていますが、テツなんです。テツというか、テツちゃんと言われているいわゆる鉄道ファン。そういうことをご存知の方が割と多くて、阿部さんなら映画にしてもらえないんじゃないかと、一畑電車の企画を持ってこられました。

それが「BATADEN」というタイトル名で、BATADEN というタイトルって、なかなかちょっとキャッチではありますが、「バタデン」って何？という話から始めなければいけません。映画というのは作った方がいいが、やはり配給会社、例えば松竹さんや東宝さん、分かりやすい

うと小売屋、小売店...、映画館というのは最終的に興行的に 1,800 円払うというのは小売店になるわけです。小売店の営業をかけなくてはいけないということで、配給会社がどうしても必要になってくる。配給会社はタイトルだとか監督だとか、誰がキャスティングされているとか、ある程度、商売のことを考えますので、「BATADEN」というのはちょっと、やっぱり...という話になって、その時、ふと思いついたのが、「これは BATADEN というタイトルではないですよ、これは RAILWAYS というタイトルですよ」と言ったら、「RAILWAYS ですか」となりました。というのは、東宝で「ALWAYS」という映画をやっており、ALWAYS に「R」と「I」を入ると RAILWAYS というタイトルになる。ひょっとすると、RAILWAYS と ALWAYS を間違えて、観に来てくれる人がいるんじゃないかというような思惑もちょっとあったりして、松竹さんをお願いし「RAILWAYS」というタイトルになりました。

1 作目は中井貴一さんの主演で、49 歳で運転手になった男の物語、ご覧になった方がいらっしゃったらちょっとダブりますけれども、その主人公の中井貴一さんは 50 歳という、定年まであと 10 年、ある大手の電気メーカーの、架空ですけど、部長クラスから役員になれるが、その条件としてリストラをしなさい、うまくやれば役員になれるよという中で、たまたま島根にいますお母さん（奈良岡朋子さん）が倒れられて、一人で住んでいるんですね、ご主人を亡くして。そこへ帰って、東京へ呼び寄せようとするんですが、お母さんはここに居たいということで、自分もそこで、小さい頃からの夢だった電車の運転手を、49 歳で本当になれるかどうかというのは別にして、映画上のことですから、「電車の運転手募集」というポスターを見て、条件が 20 歳以上ということで当てはまる、そこで電車の運転手になる。大人の寓話。大会社の役員が保証されているのに、電車の運転手というのはメルヘンチックなんですけれども、ただ、そこは自分の少年時代の夢を実現させたいというストーリーです。

それを撮影していたのが島根で、一昨年の夏、公開は昨年だったんですが、その時に、ずっと島根の景色を見ていて、「RAILWAYS」ってシリーズにできるかと思ったんです。今までのシリーズ映画は、ご存知の通り釣りバカや寅さんとか、キャストやスタッフも一緒に、音楽も設定も一緒というのがシリーズなんですけど、「RAILWAYS」は鉄道というテーマでもって、色んな人生を描く、そして場所も変えるという映画があってもいいんじゃないかと思いました。

これはシリーズ化できると思った時に、実は最初に思いついたのが富山なんです。次は富山でやりたいと。最初に言いましたように、実は僕はテツです。テツにとって富山地方鉄道というのは非常に憧れるんです。皆さん地元でいらっしゃるんで日常かもしれないけれども、すごく魅力的な、まず 1 つは立山連峰を背にして日本海、そしてすごく魅力的な駅がいっぱいあったり、実は昭和 50 年代まで、名古屋から名鉄が立山まで乗り入れた時期がありまして、名鉄の名車と言われている、その後は会津鉄道のディーゼルカーになり、国鉄の特急ディーゼルと同じような仕様なんで、ちょっと細かい話になっちゃいましたね（笑）。すごく綺麗な電車、気動車、ディーゼルカーが名鉄の駅から犬山に入って、高山線入って、富山に入って、富山で地鉄さんに 3 輛くらい入って。僕が本当に悔やまれるのは、その実物を見たかったなというのがあったんですが、それくらい富山地鉄が大好きなんですけど、「もし、できるんだったら富山地鉄さんでやりたい」というふうに思っていたんです。

映画興行について

ご存知のように、映画というのはやはり興行というのがめちゃくちゃ大変で、よく興行 40 億突破とか、何とかという数字が出てきますけれども、実は先程言った話とちょっと関連するんですが、例えば分かりやすいように 100 億突破とか言って、確かに映画館での小売という意味では 100 億なんですけど、実は小売店ですから卸値というものがあるんですね。考え方としては卸値ではないんですが、劇場側の取り分、これが 50%。ですから、商品でいうと半分で商品を卸して、倍で売るといような、裏側から言えばそういう話になるんです。そうすると、100 億といっても実は 50 億。もう 1 つ、映画を作った、僕もプロダクションをやっている時に社員が、例えば「踊る大捜査線」は私どもが作った映画なんですけど、100 億という興行、今では 102 億ですけど、「社長、あれ、いくらで作ったんですか?」、社員ですから、「だいたい 7 億くらいかな」と言ったら、「93 億も儲かったんですね」と言うんですね。自分たちの会社の社員ですらそうですから、みんなそう思っているんです。製作費が 7 億ならば、100 億の興行があれば儲けは 93 億だと思うんですが、実は映画というのは宣伝費が莫大にかかるんです。作ってみても、誰も知らなければ意味がない。よくテレビでスポットで映画の宣伝をしますが、あれ全部、基本的にはお金を出して媒体を買って、宣伝を打つ。空中戦と言っていますが、空中でやったり、新聞広告とかあらゆるプロモーションに、ものすごくお金がかかる。実際、事業費というのは、製作費 + 宣伝費 + プリント費。プリント費というのは、例えば 400 館でやると 400 本のプリントが必要。これがまた、ばかにならない、1 本うん十万。スクリーンが多ければいいというものではない、スクリーンが多ければ多いほどプリント代がかかる。最近はデジタルスクリーンがあるので、デジタル化するとフィルムが安くなるので、そこはだいぶん助かってはいるんですが、そういう金額がかかってくる。ですから製作費がこれだけでも、だいたい頭の中で考えて頂くと倍、事業費としては倍。事業は製作費とアドバタイジング（広告）費。例えば 3 億で作っても、宣伝費が 3 億、プリント費 1 億で 4 億。つまりイーブンじゃなくて、逆に P & A（Print & Advertising）と呼んでいるものが重くなったりするんですね。それを回収するとなると、さっきお話した「20 億ってよかってね」といっても、半分で 10 億ということは、10 億からそれを引くと 3 億しか残らない。だから、なかなか映画というのはビジネスとしては非常にシビアなところだと、まずご承知おき頂きたいと思います。

富山で撮影して感じたこと

ちょっと長々お話ししましたが、今回「RAILWAYS」を富山で撮るという時に、島根で撮って、この興行として、ビジネスとして成功したのかということ、実は成功しませんでした。もっといくと思ってやってきましたが、やはり良い映画が売れるわけではなくて、満足度は 94~95%、観た方にとって非常に満足度は高かったんですが、興行的にはだいたい僕の目論見からはちょっと離れてまして。例えば製作をする時に色んなところから資金調達をするわけですが、その中には配給会社、出版社、放送局、広告代理店、通信系が入って、それぞれパーセンテージが異なるんですが、今回は富山市さんにも 5% 入って頂きました。地方自治体として映画の製作委員会で出資をするというのは極めてまれ、多分初めてだと。森市長が議会の中でお通しになって 5% の出資をして、「ね、阿部さん、これってヒットすると儲かるんだよね」「もちろんです」と言ってますけど、「返ってくるお金なんだよね」「もちろんですよ」と言いましたけれども、

もちろん儲かればですよ。ただ、儲かるには今言ったみたいに、相当な、例えば興行収入がないとなかなかなので、前はそういったことだったんです。

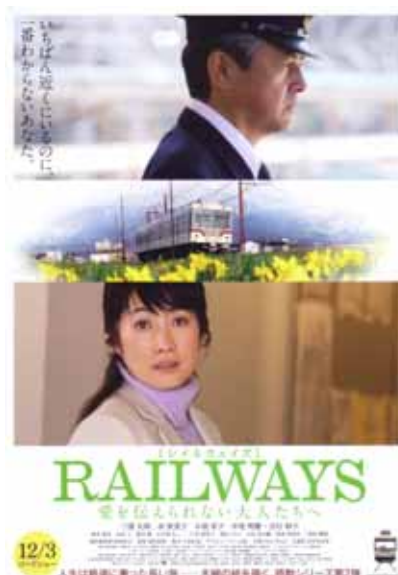
でも、「RAILWAYS」は非常に良い映画だと松竹さんもシリーズ化して次に繋げたいということで今回できることになり、いよいよ完成しました。これからの話は少しオーバーになるんですけど、実は最初に現場のプロデューサーが富山地鉄さんにこういう映画を作りたいんだけれどもと行ったら、どうも富山地鉄さんは乗る気じゃないと、あんまりやってくれそうな雰囲気じゃないと。おかしいなあ。こういう映画って、やってもらったら全国的にもという話もしたんですが、どうも乗る気じゃない。で、撮影したらものすごく協力して頂いたんですが、その話をしたら、どうも当時はこういう映画を作ってもらったらいいなあと思っていらしたらしいんですが、そう思っていた時に話が行ったので、てっきりオレオレ詐欺だと、こんなうまい話はない、気をつけるよと。ということが、どうもその時の反応だったみたいで、実際にそういう撮影をするんだと具体的にやっていったら、本当に映画になるんだということになって、もの凄く協力して頂きました。

実は鉄道の撮影は非常に危険も伴いますし、シビアなことが要求され、これをやりたいんですがと言っても、なかなかそれは難しいんですよということが多いのですが、今回、富山地鉄さんはそんなことが一切ありませんでした。会長、社長の号令一下で連携され、各部署も調整されて、こちらの要求に対して1つもNOとは言われずに、全部の撮影ができました。これから先、もし次があった時に、本当にここまでできるかなと心配なくらい素晴らしい撮影ができました。

今日はちょっとその触りといいますが、DVDを用意しているので見て頂きたいと思います。

～「RAILWAYS」予告編～

こんな感じの映画なので、ぜひ来週の11月19日、全国は12月3日なんですが、2週間早く公開しますので、ぜひ盛り上げて、この映画を富山から全国へブレイクさせていければいいなと思っていますので、ぜひご協力をよろしくお願いします。



クランクイン前日の3月11日

主役は、三浦さん演じる滝島徹という富山地鉄の運転手さんなんですけれども、実はこの撮影が3月12日にスタートしまして、ご存知の通り3月11日に大震災が起こったわけなんですけれども、実はすごく苦しかったです。3月11日の午前中に富山市の日枝神社でお祓いをして、その日の午後2時40何分に起こったときは、全然分からなかった。夕方になってどんどん状況が分かるにしたがって、すごいシリアスになり、その日の夜に三浦さんと話しました。やるべきかやめるべきか。実はこの時に計画していた映画がずいぶん中断、中止になりました。我々にとって、僕も愕然とするんですが、富山、もちろん西の方は何にもなかったんですが、テレビのモニターから出てくる映像と、町の平和的なギャップがすごく考えさせられるものがあったのです。夜、三浦さんと「これを進めるべきかどうか」と。「三浦さん、もし、どうしても被災地

に行ってボランティアをやりたいというなら、僕は止めやしないし」「でも、やめたからといって何をするの?」「俺たちは映画を作ることじゃないか」「これを一生懸命にやろうよ」と、2人で励まし合いながら、我々のことだけでなくスタッフもいますので、モチベーションをどう上げていくかと、随分、話し合ったことを思い出します。やって良かったのか悪かったのか、最後の映画がで上がるまで分からなかったんですが、できたものを観て、やって良かったねと三浦さんと話しました。

実は、この裏に僕は同時に2本くらい走っていたので、あの時のことを思い出すとひとつひとつ、作品の中で自分の映画人生にとっても思い出に残る作品になったなと思います。

2．映画先進県へのすすめ

フィルムコミッション

いよいよ「映画先進県へのすすめ」。富山県で撮影してみたら、景色はいいし、本当に富山県は素晴らしい。三浦さんもことある毎に、富山県の人には優しいし、食事も美味しいし、素晴らしい県だと話していました。

今まで富山県で作った映画と言えば「劔岳 点の記」、「釣りバカ日誌」、古くは「黒部の太陽」、随分作られていますね。今回の映画を作っている最中に、富山でフィルムコミッション（FC）が立ち上がりました。映画のロケサービス。富山市の観光振興課が中心になって始めるんですが、全国には相当数のFCがありまして、市単位で65団体、一般は29団体、全部で100団体くらいあるんです。次の映画をちょっと見て頂きたいのですが、実はこれも僕の映画で、僕がプロデュースして作った「ワイルド7」という映画です。

～「ワイルド7」予告編～

あまりにも「RAILWAYS」と違うのでビックリされたかと思いますが、これもちょうど同じ時期に、大分で作っていました。今、「映画先進県」というタイトルを付けたのは、「ワイルド7」はご覧になってお分かりの通り、公道とかビルとか、そういうものを全部封鎖してあります。そういうことをやるのがFCなんです。北九州のFCは歴史も古いし、非常にしっかりしていますので、何本も手がけています。これは大分県と福岡県で撮っていますが、地元の映画ではないんです。多分、街を東京と見立てて、そういう風に封鎖するのですが、東京ではとてもできない。ですから企画が上がった時に、すぐに製作部隊、プロダクション部隊はこれは北九州でしかできないと決めました。そういうことで、途中で非常に人がたくさんで来て、あれは中央駅という設定でやっていますが、500人～800人くらいのエキストラを募集しています。募集をかけるのもFCの仕事、場所を見つけてくるのもFCの仕事、道路を封鎖するのも連携して止めるのもFCの仕事。

今回、富山でFCが立ち上がりました。富山ですべての映画を立山連峰をバックでは撮れないわけで、いろんなことをやって頂けるというところが地域の活性化につながります。例えば、ロケ隊だけでも100人の人間が来て、1カ月も2カ月もいます。地元の産業も非常に活性化されるわけです。

富山の映画人口

今日講演をするということで、ちょっと調べてみまして、富山県の人口は 110 万人くらい、石川県と余り変わらない。石川県はもう少し居るのかなと思っていましたが、そんなに変わらない。でも、ビックリしたことがあるのです。映画館の数、石川県は 10 あります、富山県は 3 館。富山の映画人口は年間 130 万人くらい。人口が同じくらいの石川が 240 万人くらい。石川県の人は倍近く映画を観る、人口がほぼ同じなのに、映画を観る人口が 1.8 倍くらいあるんです。富山県は興行的には全国の 0.84% の興行人口を持っていますけれども、実際に石川県だと倍近く 1.5% 以上のシェアを持っている。何で富山県と石川県の人口が一緒なのに、こんなに違うのか、そこまでまだ分析はしていませんけれど、サイト数も違うし、そういう意味で、映画に関して県全体で映画館が少ないのは、観ないから少ないのか、少ないから観ないのか。もっと映画を観るような県にする、地域の人達が映画に対してもっともっと意識をするためには、FC の存在はすごく大きいと思います。安心材料でもなんでもないんですが、新潟県を出すと、新潟県は人口 240 万人くらいですが、映画を観る人口は富山県と同じくらい。つまり、新潟県と石川県を比べると 4 倍くらい違う。石川県の人は新潟県の人 4 倍くらい映画を観るということになります。

映画撮影地として繁栄するために

ですから、映画先進県のすすめというのは、とりあえずいろんなデータベースを作って、地域で連携する、こんな場所があるよ、あんな場所があるよと。今回の富山地鉄さんは非常にいいノウハウを蓄積できたと思うんですが、僕が本当に望みたいのは、富山という立地、飛行機で東京から 1 時間、鉄道でも 3 時間くらい、新幹線ができると 2 時間 7 分で来る。そういう意味では非常に近い、空港から街が近い、そういう要素を全部加味し、これだけの自然があるということは、映画の撮影をするのに富山は適しているわけです。これだけ土地があるので、僕は、これから見て頂く「ALWAYS 三丁目の夕日」みたいなオープンのセットを、皆さんの力で富山県で作って頂いて、昭和の、そうすると、そこで撮影をする映画が増えると思うんです。中国にもあります、上海にも古い街並みのオープンセットがあります。ソウルにもあるんです。日本には山形に時代村というのがありますが、まだ、昭和をテーマにしたオープンセットのスタジオはないんです。今、映画先進県というか、そういう装置、ファシリティを皆さんの力で作って頂ければ、必ずそこに行かなければならないことになるのではないかと思います。

日本の映画産業の可能性

映画産業はこれからどこへ行くか分かりません。我々の力で何とかしていかなければならないと考えているのですが、あと 40 年もすると日本の人口も 1 億を切って 9,000 万人台になるという話が出ています。実は日本の映画は海外に輸出できない、言語的な問題もあるし、ストーリー的にも日本を舞台にして日本人向けの映画ばかりなんです。それは何故かということ、1 億 2,000 万人いる人口が問題なのです。1 億 2,000 万人いるので商売ができてしまう、100 億とか 170 億とかいう興行収入を出したこともある。そこをみんな狙っているんですが、実はどんどんマーケットがシュリンクしている。韓国は 4,000 万人しかいないので、韓国では映画は立ち行かないというのが分かっている、どんどん海外に出ようとする。海外というと、ソニ

ーでもホンダでも日本の工業というのは外に出ていくことで、今でも外に出て行って市場を獲得しています。日本の映画も同じようにブレイクスルーしていかないといけないが、なかなか外に出て行けずにいます。

しかし、アニメーションだけは何とかなるんじゃないかということで作ったのが、12月17日に東宝系で公開される「friends」という映画なので、ちょっと見て下さい。

～「friends」予告編～

アメリカにはピクサーという巨大なアニメスタジオがあります、最近では「カーズ」だとか、その前は「トイ・ストーリー」だとかヒットを飛ばしているピクサーに挑戦した、山崎貴という「ALWAYS」をてがけた監督の作品です。彼が、「泣いた赤おに」って多分ご存知だと思いますけれども、浜田廣介さんの素晴らしい教科書にも載っているものをベースにしまして、こういう形で泣いた赤おにを「もののけ島のナキ friends」というタイトルにしました。こういうものが最終的にアメリカのハリウッドに対抗できる日本のコンテンツに一番近いと言われています。

これを見て気が付いた方がいらっしゃったかどうかは分かりませんが、このアニメはプレスコって手法、普通アフレコっていうのは音を後でつけるアフターレコーディングなんです、プレスコという最初に全部話を録っておいて、その口に合わせて逆にアニメを作る、CGで口の動きを作るという非常に凝ったやり方をしています。ですから、シンクロというリップシンクロをちゃんとしている。最初に香取君と声を録ったのが2年も前で、2年前に声を録ってからCGを作っていく作業をしているので、非常に手の込んだやり方だったのです。こういうことを次の時代に、アメリカというか日本が生むコンテンツになって行ければなという1つのテストです。世界を変えたいと思っています。

2年くらい前のアカデミー賞で、滝田洋二郎監督の「おくりびと」が外国語映画賞をとったのを多分皆さんご記憶にあると思いますが、それと一緒に「つみきのいえ」という、おじいさんが海の中で自分の記憶を辿るというのをご覧になった記憶があると思いますけれども、あれは私どもが作って、もし授賞式の様子をご覧になられた方がいらしたら、アカデミー賞の会場で喜んで立ち上がったのは僕です。ただ、「おくりびと」がアカデミー賞をとったから、「つみきのいえ」がアカデミー賞をとったから、これで日本のコンテンツが世界に通用したという報道のされ方をされますけれども、全くそういうことはないです。「おくりびと」に関しては外国語映画賞という本賞とは全然別のカテゴリーだったりするので、それから「つみきのいえ」はとるつもりでとったわけじゃなく、それはラッキーだと思いますけれども、とるつもりでなかったんだから、そんなに偉ぶることじゃないよと作った人が言っています。実際、一番喜んだのは僕なんですけれども。そういうことで言うと、日本のコンテンツが何とか世界に通用するような時代になるには、皆さんの力も必要だし、映画、スタジオを本当に作って頂ければ素晴らしいなと思います。

富山県にオープンスタジオを

最後に「ALWAYS 三丁目の夕日'64」という、64というのは1964年の意味で、ご存知の通り東京オリンピックがあった年です、とというのは、時代がだんだん、昭和33年、34年、の続が35年くらいまでを描いて、それから4年後という昭和39年の設定で作ります。

して、先の「friends」もそうですし、3Dという立体映画で上映もありますので、メガネを掛けて観て頂ければいいと思います。今まで3Dは若者のものだろうという方が多いんですが、ALWAYS みたいな、ちょっと大人向けの、シニア向けのものでも、3Dで作ってみたいんじゃないかと。今日は3Dじゃないです。どんなメガネをかけても3Dにはなりません（笑）。「ALWAYS 三丁目の夕日'64」、ちょっと長いです。ちょっと泣けるかもしれません。見て下さい。

～「ALWAYS 三丁目の夕日'64」予告編～

来年の1月21日に3Dでご覧頂けますので、ぜひ、観て頂ければと思います。

今、ご覧になったように、この街はセットで作って、3作目なんで3回セットを組むんですね、同じものを。64年なのでちょっと、茶川商店を2階建てにしたり、鈴木オートを少し拡張していますけれども、セットを何回も何回も作るというのは何だかどうだろうという気持ちが常にあります。同じものを作るわけなので、そこのストレスたるや意外と大変で、1つ目は何とか作るんですが、2つ目って1つ目と全く同じものを作らなければいけないという、しかも汚しとか、1作目は適当に汚したりできるじゃないですか、2作目は写真を見て汚したところを全部再現しなくてははいけない。

ですから、先程話したように、富山にそういう大きなオープンスタジオができれば、ALWAYSのシリーズ4はぜひ富山でやってみたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

駆け足になってしまいましたが、僕の作品も含め、テーマを富山「映画先進県へのすすめ」と大それて書いてありますけれども、題名をつけてくれということでこういうことにしました。

11月、来週の土曜日、そして12月17日と21日と、1月21日を、まず手帳に○を付けて頂いて、そして、ぜひご覧頂ければ嬉しいなと思います。石川県に負けずに、石川県の人が富山県より映画が好きだとデータ上なっているので、ちょっとびっくりしました。ぜひ、映画をたくさん観て下さい。

